

第37回梅園学会報告

△三浦梅園 以前の道と歩くウーキーン(金)は梅園学会の行事として、今年で三年目を迎える。初回の時は、神楽坂と九軒の交差点、梅園の里(小宮)に午後三時に到着する文字通り少人数で通過した人至コースを歩いたが、昨年と今年、梅園の会を研究発表の午後二時から、効果もたれ、三分の二に短縮された。そのころ八時半に発表し、観音寺(九時半)、山浦(十時半)、谷の西白身(十一時半)、終着地、梅園の里には午後三時十分過ぎ、遅れ午後一時近くに着いた。夜城町ウーキーンが愛好会の方から主催で、子供五人を会場の後部三十人余、梅園学会からは五人が参加した。

浜田さん、宮永さん、木田さん、奥原さんと秋小川である。最後のコース、西白身から梅園(小梅園)の里、まよひかきりの傾斜の山道で、心臓破りの丘の感じであつたが、去る雨にならず何事もない。秋の参考の出原さんは別掲の感想にあるように、最後は少しキツかったよ、とあり、段々畑の美しさもあつた。感心されたのは、やはり若手あせい、三年目の秋の感想はまだ、この道の整備が整備されたいこと、毎年のこと、あつた、愛好会の方からか、一週間の草刈りなど、この日にやらせて下さつたという。道路を整備し、要所へに表紙を立てるなどは、十一年後の梅園生誕三百の記念行事の一つとして位置づけ、梅園学会自身も自覚して、とりとを必要のあることを願う。梅園学会の会員の一人としての参加も毎年増えていることを願う。夜城町ウーキーンが愛好会の方から、改めて感謝の意を表した。

研究発表紹介(まず初日の三つ。梅園の「梅島火災の謎」を取りあげた尾崎、笠嶋登巻について——四の枝のスタイルを駆使しての発表はとも効果的であつた。先づ今年すむに七八回の噴火が起きるといふ指摘が、始まる。毎年十回の噴火がある(という)知らなかった。梅園がとりあげたのは一七七九年の大噴火。桜島火災の謎と重なる中で、梅園は十一年の発表を挙げて、いふことが指摘され、梅園の情報収集力、問題を見える直観力、水火から水爆へという編集能力が抜群である(笠嶋氏は評価される)。その中の一つは、一八五五年(天武)は伊豆から伊豫・土佐にかけての南海地震が起きている事実を紹介する(日本書紀)。すべしと和歌のスタイルに込めた発表は、日の名前の入った目に焼けただけ、勿体ないので、梅園学会報誌上に記録すべきものとする。発表者は依巻さん。

初日二つ目は「国東高校園芸科クラス」の生徒さんたち五名による「ハマボウフウの研究」発表であった。ハマボウフウとは漢字で表せば「海防風」となり、稀少植物で、その根が下熱の効用があり、園芸業界の中に少量ながら入っていると言ふ。保樹活動と共に産業界、如斯のウーキーン、その要請に応じた研究もあるという。

分たすの発表が終つた、ナツと帰つてしまつたので残念だと一言あつた。しかし出原さんの玄談園の解明は梅園研究者が何度も「もくもく」(まみ)へきものであつたので、秋もちに収穫があつた。とりわけ次の命題が目からあつた。文、変化錯綜、図、系理解、(小宮永四郎、玄談園例目より)

「三浦梅園の養生録」(浜田亮氏)は、農村の官上、農家の生活こそ健康養生のモデルである(と)趣旨から書かれた。この前提の肉体的鍛錬、「抵抗力の強養」(情欲のコントロール)「胃腸を大げな」(食事のありかた)「医者と薬」様々な病気を分け、わかつやくの容を記すされた。

三つめは出原立子さんの「近世美術の書における図的表現——三浦梅園蔵書の調査より」である。形象系、行列系、領域系、領域系+連結系、一座標系の五つに図を分類され、玄談園は領域系+連結系に当るとされた。領域系は目で見えない関係性を表すという。調査の結果梅園の玄談園は他に比較すると、めい位、群と扱つて、結論された。そのあと、高校生を玄談して玄談園の特徴をおさらいされたが、高校生たちは自

変化錯綜と系理解は一一の關係にある。前者は事、後者は物と規定されたか、玄談園は系理解を示すものという梅園の指摘は重要である。玄談園の重要概念をこれ程詳しく物語るものは目につかない。尚、右の命題は最終玄談の例にもそのまゝ見られる。

「梅園全集出版百年目——新しい三浦梅園全集」への道(小宮俊正氏)では、今年から梅園全集が刊行される百周年に、ことと中心に、藤井嘉隆氏のことについて紹介された。彼が大正元年八月に関東州に出向のため、神戶、東京の校長を退任したことが、梅園全集の校正を不十分なものにしたのでは、ないか、と、所長を言及された。また、今年から「梅園全集」の「梅園大蔵」創設百周年に、今年には「梅園全集」の出版を指し、秋の発表を控えてくれ、特別に「梅園」が同様にあつたことは、もとと意識されてよいし、両者は比較されたい。柳沢南波は「三浦梅園」を編集した。梅園全集は、(文庫、小川晴久)

出原先生の『發表の中を綴りつれた』文錯綜于変化、図整齊于条理には、
〇物に経緯あり、諸を文辭に寓する者、
經は先後に由りて序すべし、緯は兩緯
者発すべからず、
氣に混雜常あり、諸を圖書に託する者、
祭は各理に由りて分つべし、混は錯綜
綻開すべからず、
故に文は變化に錯綜し、圖は条理に整齊す
(あと省略)

〇物有經緯寓諸文辭者、經可由先後、而序緯不可
分、混不可罅縫綻開、故文錯綜于變化、圖整齊于
條理、夫物有統散之分、於具一天地、則小猶大也。

〇物者體成而三條理井然、事者動而相交、故運、為
紛若、雖條理井然、而在運為紛若之中、古人終不
能探窮條理之原者、運為變錯、目為之眩也、此故
斯書之文、於物勢條理整齊於事、出運為變錯、前
欲從事於斯、讀中須先辨此也、天此也、人此也、事
此也、物也、而後可以始讀斯語。

〇物は体成りて立つ、故に条理井然也。
事は、動きを相い交る、故に運為紛若。
条理井然たりと雖も、而も運為紛若
の中に在り、古人終に条理の原を探
究窮すること能はざるは、運為變錯
目之が眩に眩するなり、此の故に
斯書の文、物に於ては、条理整齊
を務め、事に於ては、運為變錯に出
づ、故も事に斯に従はんを欲せば、読中
須らく先づ辨ずべし、此や天、此や人、此や
事、此や物なりと、而して後以て始めて斯語
を讀むべし。

梅園学会に参加して 出原立字

安岐の穏やかな秋の景色に囲まれて、梅園
学会に3年ぶりに参加いたしました。梅園の
郷はいつも変わらず穏やかな佇まいで、心を
安らかにしてくれました。

初日(十月二十七日)の午前中、「梅園の里
ウォーキング」に、小川先生、濱田先生と共に
に参加し、梅園先生が枡築の綾部綱齋先生の
塾に学ばれていた時に通われた道より、三光
坊集落センターから観清寺、山浦、西白寺を
経由し梅園の里までを、梅園先生に想いを馳
せながら歩きました。かなりなアップダウン
のある山道もあり、車社会で生活している私
にとっては少々きついものですが、若かれ
し梅園先生が向学心に燃えながらこの道を歩
かれていた事が身近に感じられるような気が
しました。

このウォーキングでとても印象深かったの
は、安岐の集落と里山の美しさです。自然豊
かであるけれども、それは自然のままではな
く、人々のきめ細やかな手入れの行き届いた
集落の形、田畑の姿があり、何とも美しいも
のでした。山谷の多い地形を活かし丹念に作
り上げられた段々畑の美しさも素晴らしいも

ので、自然を活かし、そして人々の知恵を活
かした集落、生活のかたちが見えていました。
今回の梅園学会の発表において、濱田先生が
梅園先生の「養生訓」を非常に分かり易く解
説されました。その際に紹介された梅園先生
が考えておられた理想の生活が、現代の安岐
の里には今もあるように思いました。

梅園の里に滞在中に、イギリスからの観光
客の一行と出会いました。夜の懇親会の際に、
我々梅園学会の参加者と彼らとでお酒を交換
し合い、暫し談笑し楽しい一時を過ごしまし
た。彼らはトレッキングを楽しむために安岐
を訪れたそうです。日本国内にはトレッキン
グコースはたくさんありますが、国東の山は
日本の原風景を感じることが出来る質の高い
トレッキングコースだそうです。この事も含
め、今回の学会参加は、国東の新たな魅力を
発見する旅にもなりました。

私の今回の研究発表は、近世日本で活用さ
れた図的表現の調査を目的に、一昨年、三浦
梅園資料館にて梅園先生が当時読まれていた
文献(東洋医学、四書関連、天文・地理、地
図など)の中から図的表現について調査し、
それらを元に近世日本の図的表現を形體的特
徴から分類し俯瞰する試みについて発表しま

した。「玄語図」を表現された梅園先生の周辺か
ら、当時の図表現について探ってみたいと考え
たからです。当時の図的表現を広く調べ比較し
てみると、梅園先生が図について如何に深く考
えておられていたか、そして「玄語図」におけ
る図の体系は当時の思想家や他の図表現と比較
してみても群を抜いて洗練されていることがわ
かります。

発表の後半では、梅園先生が『玄語』の中で
明確に定められた図表現の規則を紹介させて頂
きました。そして、次の一文に象徴される、文
と図の根本的な表現性の差異について、あらた
めて確認した次第です。

「文、変化錯綜し、図、条理整齊す。」
(安永四年本『玄語』例より)

最後に、いつも梅園学会に参加して感じる事
として、安岐の地元の方々が本心に熱心に発
表を聞いて下さり、また探究心に燃えていらつ
しやる事です。梅園学会が今後もっと地域の方々
に開かれた会となり、
地域の方々が自由
に発表し合える場になる
ことを願っています。

